

# 小学校外国語（英語）の教員養成コア・カリキュラム —押さえておきたいポイント—

澁井 とし子

## Core Curriculum of English for Elementary Teacher Training: Valuable Points

SHIBUI Toshiko

As for a teacher training course of elementary school at university, all the students in this course should take classes such as “method and technique” and “expert matters” of elementary school English in 2021. The author has already taught combined core curriculum lessons since 2016, and had exactly the same classes as the “method and technique” and “expert matters” at some different universities in 2018. As a result of the advance experiments, several considerations are come up, and these were very similar to the previous researches (Inowe, Hosoi, & Morishita, 2017 ; Kato, 2018 ; Shimizu & Furuya, 2008 ; Iida et al., 2019). Therefore, this study examines which contents in core curriculum are possible to teach in each fifteen-class, and suggests valuable points for an elementary school English in teacher training course at university.

### 1. はじめに

文部科学省は2017年3月、2020年度からの次期学習指導要領を公示した。昨年の2018年度と今年の2019年度は、2年間の移行期間として各学校で高学年の小学校外国語（英語）の教科化本格実施に向けて、様々な取り組みがなされている。また、中学年の3、4年生も週1回の外国語活動が実施されるようになり、2011年に高学年の外国語が必修化となった時と比べると、活動内容に更に大きな変化を迎えようとしている。

一方、大学での教員養成に関しては、小学校教員養成課程の外国語（英語）

コア・カリキュラム「外国語に関する専門的事項」と「外国語の指導法」が免許取得希望者全ての対象となる。それにより、私立大学では2021年の大学3年生から初等教科教育法（英語）が小学校教員養成科目として開講する（短期大学では、2020年の2年生から）。

これに先立ち筆者は、2016年・2017年度に小学校教員養成課程「外国語（英語）コア・カリキュラム」の「外国語に関する専門的事項」と「外国語の指導法」を1科目にまとめた15コマの授業を、そして2018年度に「外国語に関する専門的事項」と「外国語の指導法」に相当する両方の授業を異なるいくつかの大学で15コマずつ担当した。その結果、小学校で外国語を教えることのできる教員の養成に関していくつかの検討事項が浮き彫りになった。

それらは先行研究（井上, 細井&森下, 2017; 加藤, 2018; 清水&古家, 2008）で教員養成課程において課題になると指摘されているものと同じような結果になった。また、教員養成課程コア・カリキュラムの実態調査（飯田ほか, 2019）からも課題が明確になっており、それらの実態とも本研究結果は一致した。よって本論では、先行研究に基づきコア・カリキュラムで抑えておくべきポイントを明確にし、2021年からの教員養成に役立つように提案を行う。次節では先行研究を概観し、第3節では研究の目的を、第4節では研究内容を、第5節では研究結果を述べる。そして最終2節では、研究結果のまとめと今後の課題について触れる。

## 2. 先行研究

井上, 細井&森下（2017）は、小学校教職課程において「英語力」と「英語指導力」をどのように身につけさせるのか、授業時間が限られた中で行うことが課題であると述べている。また、第二言語習得についての知識もコア・カリキュラム授業では必須内容であり、小学生を対象にしたコミュニケーション能力育成の「授業実践」に必要な知識であると示している。

加藤（2018）の調査では、現職教員がクラスルームイングリッシュを使える英語力を必要と感じており、英語力の不足に不安を感じていることが明らかになった。そして「英語力」以外にも「指導力」を必要としており、大学での教員養成課程での指導の最優先項目として挙げている。また、指導案を教員自らが立案できる必要性も指摘しており、活動をただ繰り返すのではなく、柔軟に指導案を修正できる力も小学校現場では求められていると述べている。

東京学芸大学（2017）の「小学校教員養成コア・カリキュラム（試案）」の

検証アンケートでは、25名の大学教員と162名の指導主事からの調査結果をまとめているが、その結果は次の通りである。第二言語習得といった専門的な内容を学ぶことはあまり重要視されておらず、英語という言語習得に関する理論面の大切さが理解されていない結果となった。一方自由記述からは、小学校で英語を教えるためには理論を学ぶことも重要であり、その知識を理解した上での授業づくりが大切と指摘する意見もあった。

また、同じく検証アンケートの「授業観察や体験・模擬授業」に関しては、教員養成課程で授業体験や模擬授業を十分に行うことが求められており、現場に出てからの実践力がすぐにでも必要であると示している。「授業実践」に関しては、その内容について意味のあるやり取りができることが重要視されており、今までの中学校以降で行われてきた文法指導や訳読式の指導からは変化してきている。更に学生を指導する大学教員に関しては、教員自らが模擬授業を行ったり、学生に実践練習を課したりすることから、小学校での英語教育をきちんと理解していることが前提だとしている。

「学生の英語力」に関しては、英語力育成に充てる時間が必要であるが、当面の授業時数では時間が十分にとれないため、学生各自が学ぶ必要があるとの意見もある。実際、教師の英語力は大きな課題であり、教員になってから授業で使える英語力が欠かせない（東京学芸大学, 2017）。

次に飯田ほか（2019）大学教職担当者によるコア・カリキュラムの実態調査では、大学が抱える課題や問題点、及び対応策について述べている。ここでは、「外国語指導法」で求められる内容を半期科目1つ（2単位）で実際に応用できるレベルまで理解させることは難しく、指導時間が不足していることを明らかにしている。そして求められる能力と学生の実態とにギャップがあり、「授業観察や授業分析」をサポートできるだけの授業風景の視聴などができる環境を整える必要があり、「外国語に関する専門事項」における内容でも授業見学や授業体験が不足していると指摘している。更に「英語力」に関しては、授業に必要な英語力を教員養成カリキュラム内だけで身につけていくことは難しく、学生の英語力が十分でない点も課題として挙げている。

### 3. 研究の目的

研究の目的は、

- (1) 小学校教員養成課程の学生の中には英語に苦手意識のある学生が多いことから、まずは教員を目指す学生の英語に対する意識改革を行う必要が

ある。意識改革は可能なのかを明らかにすること。

- (2) 「外国語に関する専門的事項」の15コマ、及び「外国語の指導法」の15コマを行うことで大学での授業内に可能なこと、及び消化できずに終わった内容を区分し、現状の課題を明らかにすること。
- (3) 2021年からのコア・カリキュラム実施にむけ、押さえておきたいポイントを明確にすること。

## 4. 研究内容

### 4.1 研究対象者

研究対象者は、合計126名である。小学校教員養成課程の学生、児童英語科目履修生115名には「外国語の専門的事項」を、中学校・高等学校教員免許取得希望学生（英語教育特殊研究早期外国語教育履修生）11名には「外国語の指導法」の授業を行った。

### 4.2 研究方法

研究方法は、小学校外国語に関する質問紙調査を授業受講前と受講後の2回、授業後毎回の学生の振り返り記述、コア・カリキュラムに沿った授業全体への質問紙調査、及び筆者の授業を受講する学生の観察である。

研究期間は、2016年9月～2019年1月である。

## 5. 研究結果

研究目的（1）の「学生の英語に対する意識改革は可能か」については、可能であるという結果になった。

### 5.1 学生の英語に対する苦手意識

質問紙調査の結果を見ると、2017年度は授業を受けた後に「英語は苦手（60%）や嫌い（26%）」のまま留まる学生は86%から23%に減少した。更に2018年度は、「英語が苦手や嫌い」のみに留まった学生は10%に減少し、授業を受けることで学生の意識が変化している。

まず初めに2017年9月の「外国語に関する専門的事項」と「外国語の指導法」を合わせた授業を1クラス15コマで担当していた時の結果は、次のようになった。対象学生は小学校教員養成課程の学生68人であり、これらの学生に英語に対してどういう思いを抱いているかを質問紙で調査した。授業開始時の質

問紙調査では、英語が嫌いと回答した学生は、68人中18人（26％）いた。また、英語が苦手と回答した学生は、41人（60％）であった。そして好きと回答していた学生は、9人（13％）のみであった。

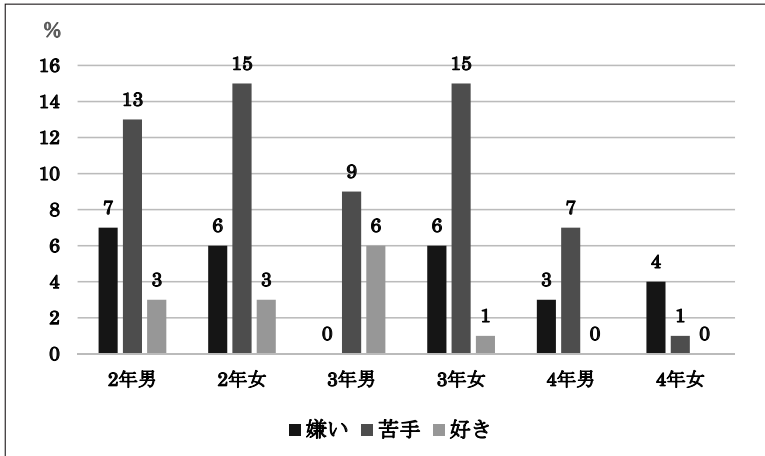


図1 英語についてどう思っているのか（2017年9月）

英語が嫌いな理由と苦手な理由を自由回答してもらったと以下のようなコメントがあった。

#### 英語が嫌いな理由

- ・小学校英語が難しくてついていけなくて嫌いになった。
- ・読みの時間と受験勉強で嫌いになった。
- ・頑張っても上達しないので嫌い。
- ・長文読解、単語が覚えられないから嫌い。
- ・中学校の英語教師が原因でトラウマを持っている。
- ・全然わからないから嫌い。
- ・中学から文法が理解できずに嫌いになった。
- ・be動詞の時点ですまずいて嫌いになった。
- ・中学のころから嫌い。
- ・単語が書けないし、意味が合致しないから嫌い。
- ・中学と高校の英語の先生が嫌いで、好きになれなかった。

### 英語が苦手な理由

- ・文法があいまいで苦手意識がある。
- ・意味を理解するのに時間がかかる。
- ・高校受験の長文から苦手意識がある。
- ・スペル、文法が苦手。
- ・単語が覚えられなくて長文読解等で挫折した。
- ・単語、聞き取りが苦手。
- ・文法が難しいから苦手。
- ・中学で先生が一方的に話すから苦手になった。
- ・中学で最初の先生の教え方が少し特徴的でつまづき続けてきた。
- ・英語の文字の並びが理解できない。
- ・英作文が苦手。
- ・聞き取りと長文読解が苦手。
- ・中学2年生で苦手になった。
- ・文法と単語の覚える量が増えて授業についていけなくなった。

以上、さまざまな理由で英語が嫌いや苦手になっているのが現状であり、中学から文法がわからなくて苦手になっているケースが非常に多かった。また、教員と合わなくて嫌いになっているケースもいくつか見られた。その一方で学生自身は「英語が話せるようになりたい」、「子どもに教えられるようになりたい」というコメントも記述している。

2017年度当初、学生は教員免許取得のためには子どもに教える英語科目が選択必修であったため、「英語」と聞いて複雑な気持ちでこの科目を履修したようである。しかし、授業内容を正しく理解し、15コマの体験型小学校外国語の科目を履修することで、学期の最後には多少英語に対する思いに変化が見られた。15コマの授業終了時にとった質問紙調査では、図2のような結果となった。楽しいと感じる学生は13%になり、「英語はできるといい」と56%の学生が感じていた。残念ながら、「苦手や嫌いのまま」とどまった学生は23%であったが、学期初めの86%から23%に減少したことは、大学での授業が効果的に作用したためであろう。

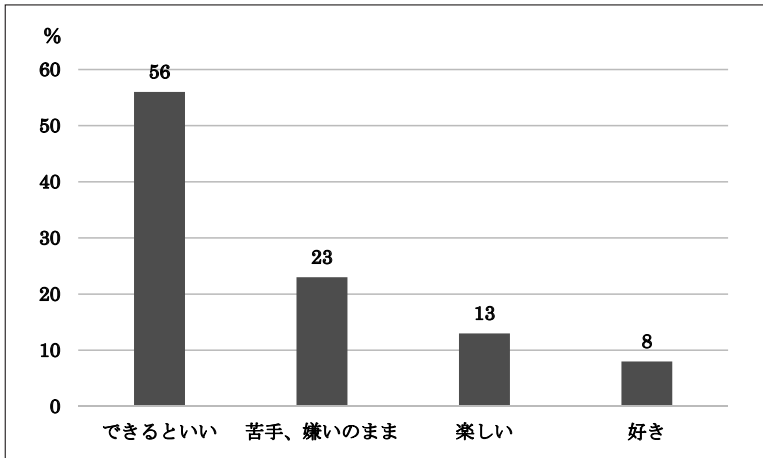


図2 英語をどう思っているのか（2018年1月）

図3は、小学校教員免許取得後に児童に英語を教えることが楽しみかどうかを学生に尋ねたものである。

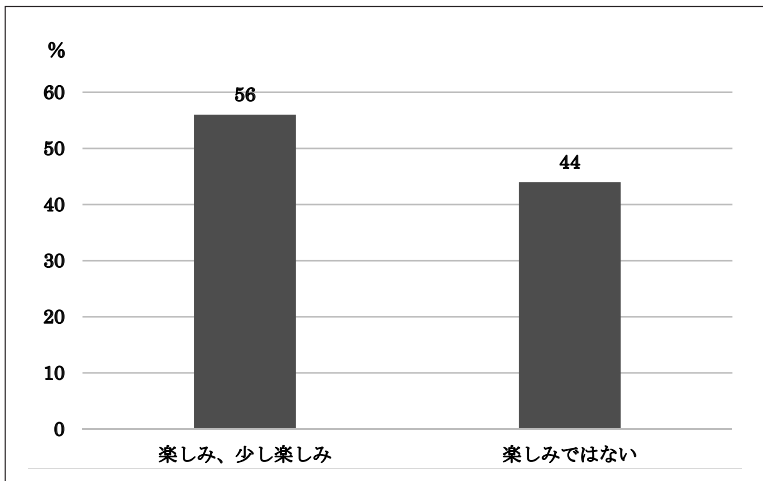


図3 小学校で外国語を教えることが楽しみか（2018年1月）

教員免許取得後に児童に英語を教えることが「楽しみ」「少し楽しみ」を選択していた学生は56%であった。反対に「楽しみではない」を選択した学生は44%おり、その理由に「教員としての自分が英語を話すことができないことに不安を感じている」ためであることが明らかになった。更に別途質問紙調査からは、英語使用に対して学生が英語を苦手であるとか、嫌いであるという以外に教員としての自分の英語力に学生自身が不安を感じていることも明らかになった。学生が感じている不安は以下の通りである。

- ・自分は英語が苦手だから、うまく伝えられるか、子どもが理解できるか不安である。
- ・小学生の白紙の頭に教えるため、それに見合う英語力が必要だと思うから。
- ・英語を授業中に使えるか、子どもたちにわかりやすく授業ができるかどうか不安である。

次に以下のグラフ（図4）は2018年度、学期初めの授業開始時（pre）と授業終了時（post）に学生にとっての質問紙調査結果である。

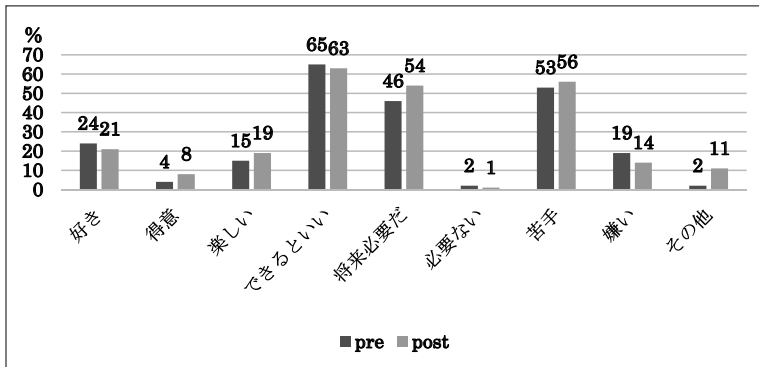


図4 英語についてどう思っているのか（2018年度）（複数回答）

英語に対してどのような思いをもっているのか、当てはまるものを選択してもらったため、回答が複数になっている。postにあたる2回目の質問紙調査では、学生の中には、英語は「苦手」を選んでいる一方で「楽しい」も選択しているケースがいくつか見られ、「英語は苦手だが、楽しい」とのコメントもあった。その他の自由記述では、「英語は話せるようになりたい」「英語で友達が



できる」「英語は自分の世界を拓げてくれるもの」「洋楽が好き」「英語を学べば英語圏に行ける」「しゃべったりするのは好き、書いたりするのは嫌い」との記述も見られた。

毎回の学生による授業後振り返り記述では、特に自分が英語を苦手と感じていたので、「児童には楽しく教えたい、学んでもらいたい。」という思いが強く出ている。また、小学校の模擬授業を学生自らが体験し、その後学ぶことで「自分は英語が苦手だけれども教えられそうである。」と変化した。このような結果により、学生が英語に苦手意識を持っていたとしても15回の授業で英語に対する意識改革（英語に対する苦手意識を軽減してイメージを変えること）は可能であるということが明らかになった。

以下は、2回目の質問紙調査で回答した学生の自由記述である。

- ・自分自身が少しでも英語を好きになり、子どもたちにその楽しさを伝えたい。
- ・英語を親しみやすいものとして捉え、学べるようになりたい。
- ・間違いを恐れずに積極的に英語を使っていきたい。
- ・そんなに硬くやらなくてもいいとわかった。
- ・どのようにしたら英語が楽しくできるかがわかった。
- ・自分は苦手でも児童には楽しく英語を教えたい。学んでもらいたい。
- ・自分は英語が苦手だけれども、児童に教えられそうである。

以上全ては、質問紙調査で「英語が嫌い」「英語が苦手」を選択していた学生のコメントである。

その他質問紙調査の自由記述には、英語が苦手な学生でも小学校の教員になり、児童に英語を教えるために、「まずは自分が英語を好きになるように努力したい」等という記述が多くあった。このように教職課程における小学校外国語の授業を通して、自分は英語を急には好きになれなくても、好きになろうと努力しようとする気持ちや、頑なに構えていた気持ちを和らげ、英語に対して前向きに向かい合おうとする気持ちが出てきたことは、筆舌に尽くし難い。従って、学生の英語に対する意識改革は授業を通して可能であると言える。

## 5.2 学生の小学校外国語見解の変化

学生の小学校外国語に対する見解が授業開始時（pre）と授業終了時（post）で変化しているため、図5～図9にその結果を示す。

図5の授業開始時には、学生は小学校で行われる外国語に対してさまざまな認識を持っており、自分が英語をあまり好きではないことから興味のない学生も見られた。しかし、15コマの授業を受けることで、小学校外国語とはどういうものかを正しく認識し、理解することで、小学校で行われる英語に対する興味に変化が出た。

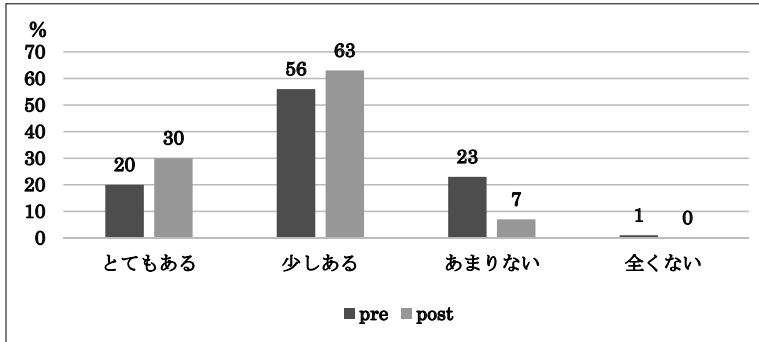


図5 小学校で行われる英語に対して興味がある

図6の授業開始時には、多くの学生は小学校外国語に対して自分の思い込みや誤解が多くあった。2018年度調査対象の大学2年生は、小学校で外国語が必修化になった2011年には中学1年生であり、小学校で行った外国語活動の経験があると答えた学生も授業のことをよく覚えていないと答えていた。そのためか例えば、小学校でも中学校と同じように単語を教えたり、文法を教えたり、パターンプラクティスをしたりというような学生が受けてきた中学校以降の英語をイメージしていたようである。しかし、授業を通して小学校では英語を教え込むのではなく、英語でコミュニケーション活動をしたり、相手を受け入れたりしてお互いをわかろうとする面も重要視されていることを学生が理解することができたので、こちらの意識も変えることができた。15コマの授業だけでは完全とは言えない面もあるのかもしれないが、全体の92%の学生が「とても理解できている、またはある程度は理解できている」と回答しており、コア・カリキュラムの目標である「現在の小学校外国語教育についての理解」に関しては、達成できた。

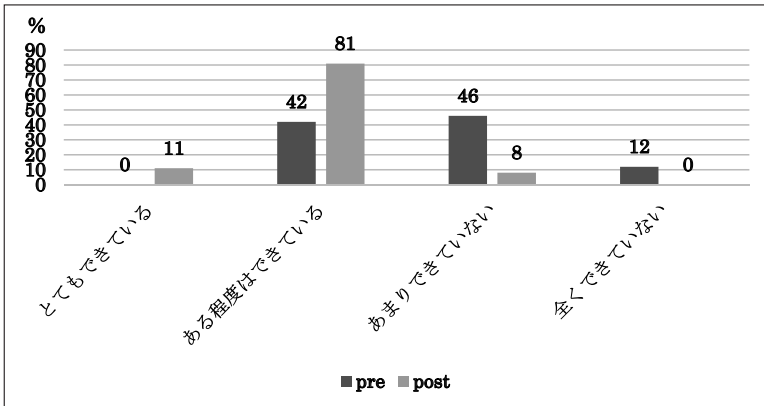


図6 小学校外国語（英語）教育について理解できている

図7は、15コマの授業終了後にとった2回目の質問紙調査の結果である。3、4年生で行われる外国語活動と5、6年生で行われる外国語とは大きな違いがある。具体的には2020年に教科化になる高学年の外国語で教科書が使用されることになる等、3、4年生の2技能3領域から5、6年生では4技能5領域になり、高学年では読み・書きも入ってくるという基本的なことは理解できているようである。

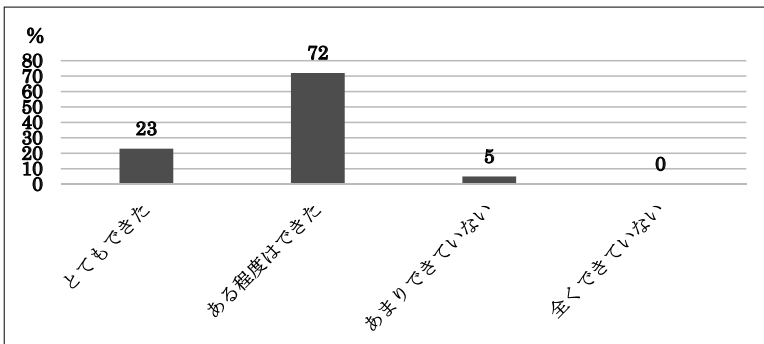


図7 小学校中学年外国語活動と高学年の外国語の違いは理解できた

また、大学の授業で発達心理学の基礎や認知・情緒発達についてふれることを通し、児童の学年により、中学年の五感を使った体を動かす活動から高学年

の知的好奇心を刺激するような活動に変化していくこと、学年による興味関心の違いがあることで活動内容が異なることなども具体的に理解できるようになり、学生にとっては大変有益であった。

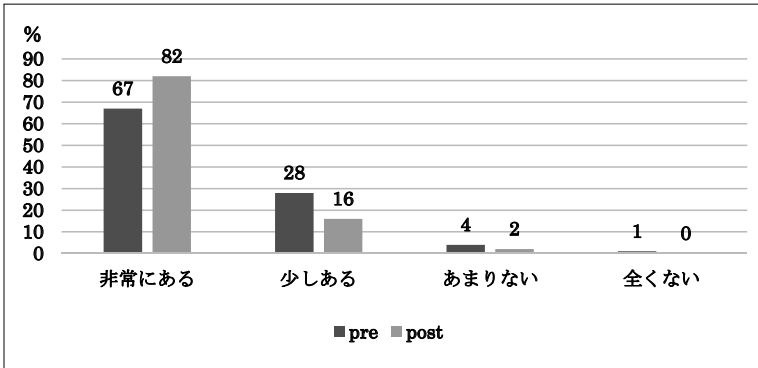


図8 小学校教員免許取得のため大学で小学校英語について学ぶ必要がある

図8では、15コマの授業後、小学校教員免許取得のために授業で外国語の「専門的事項」、或いは「指導技術」、「授業づくり」について学ぶことは大変意義があり、学生が実際に授業を行うためには、大学での授業が必要であると98%の学生が感じるようになっている。

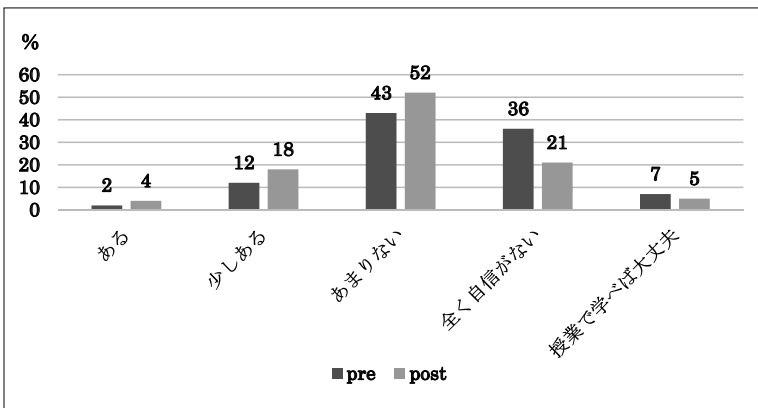


図9 教員になって英語を教える自信がある

図9の教員になって、児童に英語を教えることに自信があるかどうかについては、意見が分かれた。但し、全く自信がないと感じていた学生は減り、「あまり自信はないが教えられそうである」または、「再度授業で学んだことを学び直せば大丈夫」という回答も見られた。

次に研究目的（2）の「外国語に関する専門的事項」に関する研究結果は以下の通りである。

### 5.3 「外国語に関する専門的事項」15コマの中でできること（小学校教員養成課程外国語コア・カリキュラム構造図参照）（東京学芸大学, 2017）

15コマの授業内で以下の内容を全て終えることは可能であった。

授業実践に必要な英語力と知識

・授業実践に必要な英語力

聞くこと、話すこと、読むこと、書くこと

の運用に必要な基本的な知識の理解

英語に関する背景的な知識

・英語に関する専門的な知識

・第二言語習得に関する基本的な知識

・児童文学

・異文化理解

しかし、児童の認知・情緒発達に即した指導法、発達心理学の基礎は追加した。いくつかの理論を追加したほうがより学生が授業内容を理解できると感じただけである。それらは次の通りである。

### 5.4 「外国語に関する専門的事項」の中で追加した方が良い内容

授業実践に必要な知識、例えば発達心理学の基礎、子どもの認知発達、言語習得（正しいプロセスの理解）、動機づけは補充した方がよく、実際学生には理論を理解し、実践に移せる一助となった。これらは、2016年、2017年に筆者の授業実践を通じて授業の組み立て、指導案検討には不可欠な内容であったためである。その理由を具体的に一つ一つ示す。

#### ① 発達心理学の基礎

5、6年生より3、4年生の方が「曖昧さ耐性が強い」（岡・金森, 2012）ため、ALTの英語やモデル会話を通訳することなくともわからないことに耐え、推測し聞き続けることが中学年の方がよりできる。また、児童は先生同士のモ

デルのやり取りを見たり、“Let’s Try!” (文部科学省, 2018) や “We Can!” (文部科学省, 2018) のデジタル教材、“Let’s Watch and Think” を視聴したりして、どういう内容をやりとりしているのか推測する力を養える。更に「あーそうなんだ」と気づきを促す (村野井, 2006) ようにし、自己肯定感を高める活動を行う (岡・金森, 2012) ことで、より言語習得が促進される。授業で扱う内容は、児童の発達段階、興味・関心のあるものを選び、指導者は子どもを認めてポジティブな声かけをすることが大切である。例えば、指導案をそのまま行うのではなく、指導者自身が目の前の児童にその内容が相応しいのか判断し、そうでない場合には、児童に合わせた活動や指導を行う力も養成する必要がある。教員自らがクラスの実態に合わせて活動や方法等の取捨選択ができる力も備えた方がよい。

## ② 子どもの認知発達

今現在の児童の状態を「 $i$ 」として、それより少し上のチャレンジングな内容 ( $i + 1$ ) (Krashen, 1985) を取り入れる、指導者やクラスメイトの少しのサポートで遂行可能なことがある (ZPD) (Vygotsky, 1978) ことを知ること、サポートの大切さや学年に応じた教材の選び方、グループワーク・ペアワーク等活動の違いを理解できる。そして、必然性のある会話状況設定の必要性和意味のあるやり取りが必要 (岡・金森, 2012) な理由がわかると本物の会話を取り入れることができる。何のために行っているのか、意味がわからないために、英語嫌いになっている大学生は過去の調査でも多かった。更に個人の発達の違いや学年の違いに応じた適切な支援や足場かけ (scaffolding) (Bruner, 1983) が行えると児童がついていけずにおいて行かれるという状況を防ぐことができる。

## ③ 言語習得理解 (プロセス)

何でもいからインプットすれば良いのではなく、またたくさんインプットすれば効果的ということでもない。やはりインプットの仕方を知り、良質なインプットを行う (村野井, 2006) ことが要である。また、授業環境の作り方も情意面には影響を与えるので、情意面でのサポートの仕方との両面を理解して言語活動を行わなくてはならない。更に、どのようにしたら動機づけられるのか、褒めることと間違えの修正の仕方も指導者が正しく学んでいる方が児童の言語習得には有益である。

④ 動機づけ

子どもを動機づけるためには、教室環境を整備し（鈴木, 2017）、小さくても良いので成功体験を積み、不安を軽減する（鈴木, 2017）ことが有効である。特に発話を伴う活動では、自信がない、或いは間違えたらどうしようという不安があることで英語に対する苦手意識に拍車をかけるため、間違ってもいいから言ってみよう、言おうとすることを褒める等の不安軽減できる教室環境が望ましい。授業の最後に振り返りの時間があるが、他者との比較ではなく、その子自身の進歩をほめる、振り返りカードで4月と7月のその子の成長を先生が認めたり、児童自らが認識したりすることで自己肯定感を高めたり、自信をもたせることもできる（澁井, 2019）ので、動機づけは言語習得には欠かせない。

インプットしたものを動機づけしてアウトプットできるようにするには、その手段を指導者側が理解していることが大切である。

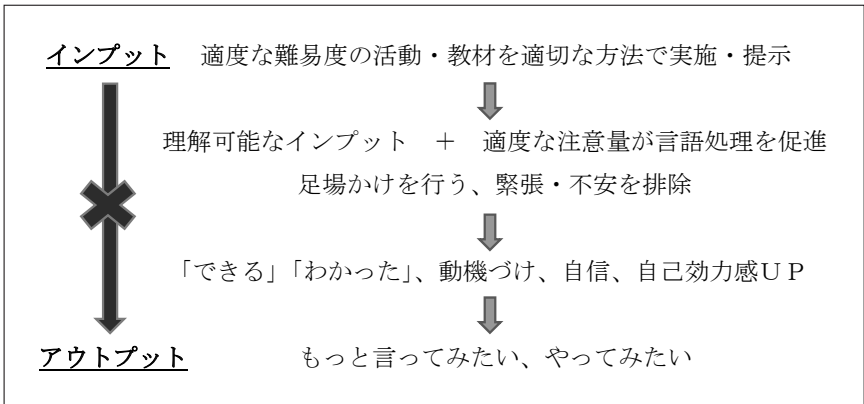


図10 動機づけ手段（澁井, 2019）

以上の理論を理解していると

授業の目標を決める、振り返る。活動内容、活動レベル、活動形態を選ぶ。  
指導案を書く、改善する。児童を支援する。児童を評価する。  
といった場面でも役立つ。

研究目的（2）の「外国語の指導法」に関する研究結果は次の通りである。

## 5.5 「外国語の指導法」15コマの中でできること（小学校教員養成課程外国語コア・カリキュラム構造図参照）（東京学芸大学, 2017）

授業実践に必要な知識・理解のためのレクチャー（授業観察・体験を含む）

- ・ 小学校外国語教育についての基本的な知識・理解  
学習指導要領、主教材、小・中・高等学校の連携と小学校の役割、児童や学校の多様性への対応
- ・ 子どもの第二言語習得についての知識とその活用  
言語使用を通じた言語習得、音声によるインプットの内容を類推し、理解するプロセス、児童の発達段階を踏まえた音声によるインプット、コミュニケーションの目的や場面、状況に応じて他者に配慮しながら、伝え合うこと、受信から発信、音声から文字へと進むプロセス、国語教育との連携等によることばの面白さや豊かさへの気づき

授業実践

- ・ 授業実践のための練習（授業づくり）  
題材の選定、ALT等とのチーム・ティーチングによる指導の在り方、ICT等の活用の仕方

以上の項目は、全て15コマの授業内に消化できた。但し、発達心理学の基礎、及び児童の認知・情緒発達に即した指導法は追加した。

## 5.6 「外国語の指導法」15コマの中で十分にできない内容

授業実践のための練習には、2項目あり、その詳細は以下の通りである。

### （1）授業実践のための練習（指導技術）

- ①英語での語りかけ方
- ②児童の発話の引き出し方、児童とのやり取りの進め方
- ③文字言語との出合わせ方、読む活動・書く活動への導き方

クラスルームイングリッシュを実際に使用したアクティビティの実践練習、ティーチャートークのモデルを先生として示してみる実践練習等を行う時間は十分ではなかった。また、読む活動、書く活動という2技能の指導技術を理解し、ジングルや音声をたくさん聞いて、音と文字を一致させながら文字を読んだり書いたりすることを指導できる実践練習が十分にできなかった。



## （２）授業実践のための練習（授業づくり）

### ①題材の選定、教材研究

### ②学習到達目標、指導計画（１時間の授業づくり、年間指導計画・単元計画・学習指導案等）

“Let’s Try！”（文部科学省, 2018）や“ We Can！”（文部科学省, 2018）のデジタル教材を紹介し、いくつかの内容を学生が体験できても、それらを学生が実際に使用した授業実践やどの教材を用いて授業づくりをしていったらよいのかという教材研究までは、学生が自ら行える時間は十分にとれなかった。

### 5.6.1 「指導技術」の問題点

指導技術を身につけるための実践練習時間が十分とれないことが問題である。「児童の発話の引き出し方、児童とのやり取りの進め方」では、スモールトーク、ティーチャートークを教員が使うことになる。5年生、6年生の“Small Talk”の時間に自然な会話をし、授業中の児童のつぶやきを拾い英語で返答するなど、即座に対応できる英語使用の場面がある。例えば、5年生では、先生と児童とでスモールトークを行い、6年生においては、児童同士で行うため、児童がスモールトークをできるように促せる英語力が教員にも必要である。しかし、英語の文章を組み立てられない場合には、自由に思いついたことをやり取りするという文部科学省が設定しているスモールトークの場面では、フレキシブルな発話をするのは難しいと考えられる。

### 5.6.2 「授業づくり」の問題点

「授業づくり」で必ず盛り込むことには、

- ① 授業観察：小学校の授業映像の視聴や授業の参観
- ② 授業体験：授業担当教員による指導法等の実演（学生は児童役）
- ③ 模擬授業：45分の授業、又は特定の活動を取り出した模擬授業がある。

#### ① 授業観察

適切な授業の視聴用リソースが不足している。最初にお手本となるモデル授業を視聴できることは、学生にとって大変有意義である。最初に見たものは印象深いため、適切なリソースは必要であり、教員養成授業には不可欠である。

② 授業体験

教員が先生役になり、学生が児童役になり、モデル授業を行える場合は、授業体験を通して本当の小学校外国語の授業を学生が体験できるため、特に問題はなかった。

③ 模擬授業

受講学生が多いと教員の眼が行き届かず、学生が先生役になり行う模擬授業のサポートが十分に行えないため、1クラスの人数も配慮すべきである。その他は、学生一人一人が先生役になり行う模擬授業時間、例えばアクティビティ等の活動を練習する時間が不足している。

特定の課題を取り出した模擬授業を行う時間を確保していて、尚且つ2018年には1クラスに11名という比較的少ない学生数であったが、学生が模擬授業を一度行うことだけで精一杯であった。文部科学省が勧める手順例の計画→準備→実施→振り返り→改善→再計画…といった授業改善（東京学芸大学, 2017）まで、どの時間を使って行うのか課題として残る。従って「外国語の指導法」の時間内だけで学生を現場に送り込めるまでの指導を行うことは、実際には十分でなかったと言える。

教材研究に関しては、“Let’s Try !”（文部科学省, 2018）や“ We Can !”（文部科学省, 2018）のデジタル教材の授業を体験できても、学生が他の教材研究を行うまでの力を養成する時間はとれなかった。

次に学習到達目標、指導計画の立て方を理解してから指導案を完成させることは、簡単な指導案を書くことはできるが、それを修正して模擬授業を行い、振り返り、更に授業改善までを行う時間が不足している。そのため、次期学習指導要領での3つの柱を理解し、児童の実態に合わせた到達目標を決めて授業を組み立てる力の養成には、今以上の時間が必要である。

最後に評価について理解することは、指導と評価を一体化させ、指導案に反映させることを考えるとこちらも今以上の時間を要する。

## 5.7 学生の英語力の問題

「英語での語りかけ方」には、クラスルームイングリッシュが不可欠であり、これを使用して授業を行うことで児童に多くのインプットを与えることができるため、授業中にはクラスルームイングリッシュを使用することが望ましい。そのため、2018年度に「外国語の専門的事項」及び「外国語の指導法」を

履修している全学生にクラスルームイングリッシュを覚える課題を出し、後日記述のテストを行ったところ、文の構成、語順が理解できていない学生が見受けられた。従って、まずは文章を理解し、それらを使えるようになる訓練が必要である。その他具体的には、“Let’s Try！”や“We Can！”（文部科学省、2018）のデジタル教材に出てくる語彙ではparfait, cabbage, Turkeyなどが読めない・書けない、そしてseahorse, starfish等の意味が解らないということがあった。

更に“We Can！”（文部科学省、2018）のデジタル教材にあるsmall talkが聞き取れないというケースもあった。こうした困難を克服するためにも学生自身の事前学習・事前準備は必須であるが、スモールトークができる、聞き取れるだけの十分な英語力の養成が必要であるため、学生自身の英語力が少しでも向上するように大学での英語の授業が設けられると理想的である。

つまり、どこで不足している英語力を補うのが今後の課題である。学生に英語を勉強したいというやる気があっても、どこから手を付けて良いのかわからない、どのように学んでよいのかわからない、といった問題もあるため、サポートが必要であろう。以上の点からしても今後は、英語使用に自信の持てる授業、または学生のサポートが大学内外でも必要である。

## 6. 研究結果のまとめ

今回の研究目的の「教員を目指す学生の英語に対する意識改革は可能であるかを明らかにすること。」に関しては、可能であるという結果になった。英語が嫌いと言っている学生を15コマの授業だけで英語を好きにさせることは難しいが、自分が受けてきた英語の授業によって感じているネガティブなイメージは変えることができた。そして、授業中に小学校外国語のモデル授業を視聴し、児童役になって実際の授業を部分的に体験することにより、「小学校で行われる英語は楽しい」、「リズムがあって覚えやすい」、「自分もこういう英語の授業を受けたかった」、「デジタル教材がわかりやすい」などと肯定的な感想が出るようになった。

次の研究目的である「外国語に関する専門的事項」と「外国語の指導法」それぞれ15コマの授業中に可能なことと消化できずに終わった内容の区分を行い、現状の課題を明らかにすることに関しては、次のようになった。「外国語に関する専門的事項」は、全ての項目を終了することができた。しかし、小学校の外国語を理解し、適切な活動を選んだり、指導方法を考えたりする際には、

授業に役立つ理論が必要であると感じた。授業実践の「指導技術」に関しては、実践練習時間が不足しており、同じく「授業づくり」に関しても模擬授業時間が不足している結果となった。更に英語の授業時間を考えるとせっかく英語に対するネガティブイメージを変えることができたのであるから、その後学生の英語力アップと英語使用に対する学生の不安軽減のためにも英語の時間はもう少し必要であろう。

最後の目的である「2021年からのコア・カリキュラム実施に向け、押さえておきたいポイントを明確にすること」は、外国語（英語）コア・カリキュラム構造図（東京学芸大学, 2017）に掲げられている授業内容を全て行うことが理想的であるが、実際にコア・カリキュラムの内容を実施してみて毎回の授業がかなりタイトなものになることが明らかになった。従って小学校の外国語の授業でまず必要なことは何かを精査することである。しかし、どの内容も学生には伝えておきたい外せない点が含まれているため、15コマの中だけで消化しようとはせず、追加の授業科目でカバーができると有意義である。ゆとりをもって指導できると指導者にも学生にも有効に作用し、より質が保証された内容で授業を行うことができる。

## 7. 今後の課題

「外国語に関する専門的事項」に関しては、英語に関する専門的な知識というよりは、発達心理学の基礎、児童の認知・情緒発達に即した指導の追加をし、どういう理由でこの活動、この方法、この活動形態が目の前の児童に相応しいのかを担任が判断できることの方が大切ではないだろうか。そのためには、小学校で児童に外国語の授業を行うためには、どの理論がなぜ必要なのかを学生が理解することが重要である。

「外国語の指導法」については、先行研究にもあるように卒業した学生が教員となってすぐに授業実践に生かすことのできる力が小学校で求められているのであれば、大学の教員養成課程で十分な実践練習時間を確保し、しっかりと指導技術力を育成する必要がある。それには、模擬授業（振り返り・授業改善）まで行える時間を増やし、丁寧に指導することが求められる。但し、これに対しても学生が小学校という環境の中で行う外国語の授業は、中学校とは違うという意味を理解し、適切な指導法を選択していく力が求められる。

以上、筆者が小学校で外国語を指導していた経験と、学生指導を始めてからの調査による見解である。しかしこれらはあくまでも小学校に外国語教育を取

り入れるという発想ではなく、小学校文化に合った小学校教員が実践できる小学校外国語を考えると課題として出てきた点であることを付け加えたい。

コア・カリキュラムに組まれた内容を全て網羅しようとするとは詰め詰めの授業になる恐れもあるため、優先順位を付けた必須項目と次に行う項目というような区分けがあっても良いのではないだろうか。小学校3年生から始まる外国語活動が高学年の外国語へと続き、その先の中学校までスムーズに繋げて行くためにも教員養成課程で正しく小学校外国語の意義を理解し、しっかりと小学校外国語の指導ができる教員を育てていくことが今後の課題である。

### 参考文献

- 飯田敦史ほか (2019). 「教員養成課程コアカリキュラムの実態調査—大学教職担当者の見解から—」 *JACET-KANTO Journal*, 6:23-41, 2019.
- 井上聡・細井健・森下裕三 (2017). 「小学校教員養成のための外国語（英語）コア・カリキュラムの効果的運用」『教職教育研究（環太平洋大学研究紀要）』 1, 1-8.
- 岡秀夫・金森強 (2012). 『小学校外国語活動の進め方「ことばの教育」として』東京：成美堂
- 加藤みゆき (2018). 「小学校現場に即した小学校教員養成課程英語コア・カリキュラム指導事項」『岡崎女子大学・岡崎女子短期大学地域協働研究』（4）, 11-18.
- 澁井とし子 (2019). 「小学校外国語：脳科学と第二言語習得の観点から」『獨協大学外国語教育研究所紀要』第7号, 37-53.
- 清水公男・古家貴雄 (2008). 「日本の英語教員養成の課題についての基礎的研究—大学での養成の課題と現場での教育実習の問題点を中心として—」『山梨大学教育人間科学部紀要』第10号, 129-137.
- 鈴木渉 (2017). 「小学生を英語嫌いにしない工夫—第二言語習得研究の視点から」『英語教育10月号』東京：大修館書店
- 東京学芸大学 (2017). 『文部科学省委託事業「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」平成28年度報告書』 <http://www.u-gakugei.ac.jp/~estudy/>
- 村野井仁 (2006). 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』東京：大修館書店
- 文部科学省 (2018). 『Let's Try !』東京：東京書籍
- (2018). 『We Can !』東京：東京書籍
- Bruner, J. S. (1983). *Child's talk: Learning to use language*. New York: Norton.
- Krashen, S. D. (1985). *The input hypothesis: Issues and implications*. London: Longman.
- Vygotsky, L. S. (1978). *Mind in society: The development of higher psychological processes*. Cambridge, MA: MIT Press.



「小学校外国語」に関するアンケート（2回目用）2018年度

1年 2年 3年 4年 男性 ・ 女性

大学名 \_\_\_\_\_

「——」の授業を受けた後の小学校外国語に関するアンケートに回答をお願い致します。  
当てはまるものに○をつけてください。記述できるものには、記述して答えてください。

1. 小学校で行う外国語（英語）教育について、自分は理解できたと思う。  
とても理解できた ある程度はできた あまりできていない 全くできなかった
2. 小学校中学年と高学年の外国語の違いは理解できましたか。  
とても理解できた ある程度はできた あまりできていない 全くできなかった
3. 小学校で行われる英語に対して興味ができましたか？  
はいとても はい少し あまりない 全くない
4. 小学校の教員免許取得のために、大学で小学校英語教育について学ぶ必要があると思いますか？  
非常にある 少しある あまり必要ない 全く必要ない  
それは、なぜですか？
5. 2020年には、高学年での英語が教科化になりますが、そのことについてどう思いますか？  
教科化は賛成である どちらかという賛成である あまり賛成ではない 反対  
その理由はなぜですか？
6. 教員になって小学校で英語を教える自信がありますか？（現時点で）  
はい 少しある あまりない 全く自信がない 再度勉強すれば
7. 小学校で英語を教えるにあたり、「大切なことは何」だと今の時点では考えていますか？
8. 皆さんは英語に対してどういう思いを持っていますか？（複数回答可）  
英語が好き 英語が得意 英語が楽しい 英語ができるといい  
英語は嫌い 英語は苦手 英語は必要ない 英語は将来必要である  
その他  
( )
9. 最後にこの授業で得たものは何ですか？何を学ぶことができましたか？

ご協力ありがとうございました。皆様からのデータは、研究のみに使わせていただきます。

